

# カザフスタンにおける日本語初級カリキュラム

## 日本人材開発センターの新しい試み

荒川友幸・和栗夏海

〔キーワード〕カザフスタン、日本人材開発センター、初級、進度表

〔要旨〕

カザフスタンは、日本の文化的プレゼンスが希薄で、日本語の実際的需要在希少な状況にある。日本センターの初級クラスでは、日本事情・文化紹介を授業中に行うことも重視しているため、日本語の語学学習時間数が限られてくる。そこで、『みんなの日本語』の各文法項目を重要度・難易度・使用可能性を勘案して、授業中に扱う比重を変えた。例えば、14課はテ形が最重要項目であるので、練習Aの「2. 左へまがってください」は授業中に定着、使用できるところまで練習するが、「4. てつだいましょうか」は紹介するだけである。

海外の現場では、日本国内の学習者向けに開発された教科書が使用されてきた。しかし、学習時間数や期間、そして学習者を取り巻く日本語環境が大きく異なることから、海外の環境に適合した教科書の開発が待たれている。本稿は、その第一歩として位置づけることもできる。

## 1. はじめに

カザフスタンは、日本の文化的プレゼンスが希薄で、日本語の実際的需要在希少な状況にある<sup>(1)</sup>。例えば、学習者は、日本語の教室外で、日本や日本語に接触する機会が皆無に等しい。在留邦人は、カザフスタン全土で108名（2006年7月現在）と極少数である。日本からの年間観光客数も2,681名（2004年）であり、その中でも、カザフスタンに滞在し観光するのではなく、シルクロードの通過点としてやってくる人が少なくない。また、メディアを通して日本の情報を入手することも容易ではない。2006年4月にはカザフスタンで唯一NHKが放送されていたケーブルTVが放送打ち切りを決定し、状況は悪化の一途をたどっている。さらに、日本語学習者の日系企業への就職は、企業数が限られているうえ、一般的に被雇用者の日本語運用能力ではなく、英語運用能力を重視することから困難を極めている。このような環境にあるカザフスタンにおいては、日本国内や日本との関係が密な海外の現場と異なり、実利的な日本語に主眼を置いた教育に意味を見出し難い。

筆者が所属しているカザフスタン日本人材開発センター（以下「日本センター」と称す）は、カザフスタンで唯一一般成人を対象とした日本語コースを設けている機関である<sup>(2)</sup>。17歳以上

のカザフスタン国民であれば誰でも受講資格があり、受講生の中には勤労者も、大学生(日本語専攻、非専攻の両方)もいる。高等教育機関の日本語専攻科のように集中的で長期的なコースとは根本的に異なり、非集中的(週2回)で学習時間も少なく、学習期間も各受講生の自由意志に任されている。

日本センターの日本語コースは2002年9月に開講したが、このときの初級1クラス32名のうち、2006年6月に上級クラスを終え、日本語コースを「卒業」することになった学習者はわずか3名であった。日本センターの受講生の多くは、日本語を「ものにする」ことが出来ないまま、日本語の学習を断念する。もちろんこのような状況を容認するわけではないが、日本語の実用的価値があまりない地域での現実としてこれは受け入れざるを得ない。しかし、このように日本語を途中で断念してしまう学習者に対しても、私たちは注意を払わなければならない。日本センターは、日本語の授業の中で、語学学習に加えて、日本事情、日本文化に関する情報を積極的に紹介し、現代日本に関する知識を提供することを重視している。日本語の学習を途中で断念した人々は、日本語の細かい文法は忘れても、授業で見た日本のニュースや授業で勉強した歴史、文学などは忘れないことが多い。日本センターの授業を通して、日本への知識を深めてもらい、日本理解者の裾野の拡大を図るのである。これを私たちは日本理解者の「底上げ」と呼ぶ。

一方、カザフスタンでも日本語の需要は皆無ではない。日本政府の調査団、大学の研究者、企業の出張者などが訪力することもあり、定期的ではないものの日本語通訳者が必要になることがある。こうした需要に応えるのも日本センターの重要な役割である。様々な困難を乗り越えて日本語学習を継続している人々は、ほとんどが日本語専攻科の上級生、卒業生の中の最優秀者で、人数は極めて限定されている。日本センターは、日本語専攻科よりもさらに高レベルの専門的な日本語を教授する場を設定し、こうした優秀者が日本語という専門技能を獲得することによって、よりよい生活ができるよう援助している。日本語学習者のいわば「頭上げ」である。

さて、本稿では、初級クラスにおける日本センターの新しい試みについて報告する。

初級クラスでは『みんなの日本語』を主教材としている。2005年春コースまでは、各課につき3回6時間かけており、学習開始から3年目に入っても依然として初級という状況であった。2年以上学習しても初級であることから、受講生の学習動機の低下がうかがえた。この状態を打破するため、2年間で初級を修了させる枠組みを設定し、2005年秋コースから初級カリキュラムを再編した。初級では、前述の理由で、日本事情や日本文化紹介を重視しているため、これらの時間数は従来通りとした。その結果、語学にかかる時間数は減らさざるを得ず、『みんなの日本語』の指導文法項目を制限することを中心課題とし取り組んだ。以下、新しい試みの内容を紹介し、受講生の授業に関するアンケート結果を通して、本試みを評価する。

## 2. 初級カリキュラムの概要

日本センターでは、一般コースは初級から上級まで開講し、4年間で全過程を修了するようにカリキュラムを組んでいる<sup>(3)</sup>。2006年春コースにおける全受講生数は157名で、その内、初級の受講生数は117名と大半を占めている。

初級は1から4までのレベルに分かれている。初級1は『みんなの日本語Ⅰ』1課から13課、初級2は『みんなの日本語Ⅰ』14課から25課、初級3は『みんなの日本語Ⅱ』26課から38課、初級4は『みんなの日本語Ⅱ』39課から50課が学習範囲である。2年間で初級全課程を修了する。

1年に春と秋、2回コースを開講しており、授業は1回2時間、週2回行われ、1コース計32回64時間(4ヶ月)である。1コースの中での授業内容の内訳は、日本語の語学学習に50時間程度で、この内語彙文型学習が45時間程度、アクティビティに使うのが5時間程度である。また、日本事情や日本文化紹介に9時間程度、その他オリエンテーションや中間・期末テストに5時間程度となっている。

前章でも触れた通り、初級においては、日本語の語学学習に加え、日本事情・文化に接する時間を授業中に保証することを重要視している。具体的には、1コース中に、ビジターセッションを2回、日本事情を4回、日本ニュースを2回、インターネット実習を2回設けている。「ビジターセッション」とは、在留邦人数名に授業に来ていただき、テーマに沿って受講生と日本語でディスカッションをしてもらおうアクティビティである。日頃日本人と交流する機会を持つことができない受講生に、自然な日本語を聞いてもらい、日本人の考え方に触れてもらうことを目的としている。次に、「日本事情」は、現代日本社会、文学、歴史などについての文章を読み、クラスでディスカッションすることを通して、日本についての知識を深めることを目的としている。原稿は筆者の一人、荒川友幸が独自に作成し、ロシア語の翻訳版を受講生に配布している。そして、「日本ニュース」は、現在日本で起きていることについての最新情報を得ることを目的としている。最後に、「インターネット実習」は、受講生が日本語を用いて日本についての情報を得られるようになることを目的としている。

## 3. 『みんなの日本語』進捗表

1章で述べたように、2005年秋コースより2年間で初級を修了するという枠組みに変更したことに伴い、語学学習に充てる時間数を削減する必要がある。

日本センターで使用している『みんなの日本語』は、日本国内で集中的に日本語を学ぶ学習者向けの教科書であるにも関わらず、当センターを含めた海外の多くの機関においても使用され続けている。これは、翻訳版や聴解、漢字、絵カードに至るまで実に様々な副教材が充実していて、総合的に日本語を教えやすいということに因る。しかし、日本国内で学習している学

習者と同等量の文法項目や語彙を教える必要があるのかという点に甚だ疑問である。なぜなら、日本センターの日本語学習の時間は拡散的、限定的であるのに、それを語彙学習、文型学習、運用力演習(アクティビティ)、日本事情などの全てに割り当てなければならないからである。

そこで、2005年秋コースから以下のように『みんなの日本語』進度表を作成し、指導項目を制限することにした。表1は、初級2の『みんなの日本語』進度表の一部である(初級2の全進度表は末尾の資料1を参照)。

まず、[回数]に注目していただきたい。2時間を1回とし、各課を何回で教えるのかという指標である。14課は3回、15課は2回、16課は1回と設定している。その課の文法項目の重要度や難易度を勘案して回数を決定した。例えば、14課はテ形の導入課である。動詞のグループを理解し、その上でテ形の活用を覚え、定着を図らなければならない。従って、3回6時間かけて教えるようになっている。

次に[重要度]について説明する。[文型項目(練習Aに沿って)]に記載されている文法項目は、『みんなの日本語』の練習Aに掲載されているものである。ある課の中でも、まんべんなく文法項目を教えるのではなく、項目ごとに比重を変えるようにした。星マーク( )3つは、最重要項目で、授業中に完全に定着をはかり運用も可能にする必要がある項目、2つはクラス全体で練習はするが、授業中に定着するところは求めない項目、そして1つは文法項目を紹介するが教室では練習を十分に行わない項目となっている。例えば、14課はテ形が最重要項目である。従って、[文型項目(練習Aに沿って)]の①②③を星マーク3つとした。④「～ま

表1 初級2『みんなの日本語』進度表

課	回数	文型項目(練習Aに沿って)	重要度	導入回	備考
14	3	① 書きます 書いて		1回目	
		② 左へまがってください。		1回目	
		③ すみませんが、塩をとってください。		1回目	
14	3	④ 手伝いましょうか。		2回目	
		⑤ ミラーさんは今レポートを読んでいます。		2回目	
				3回目	
15	2	① 鉛筆で書いてもいいです。		2回目	会話、聴解 アクティビティ
		② お酒を飲んではいけません。		2回目	
15	2	③ 私は京都に住んでいます。		1回目	
		④ ミラーさんはIMCで働いています。		1回目	
16	1	① あした神戸へ行って、映画を見て、買い物します。		1回目	会話
		② 電話をかけてから、友達のうちへ行きます。		1回目	
		③ カリナさんは背が高いです。		1回目	
		④ ミラーさんは若くて元気です。		1回目	

しょうか」は、この課の重要項目テ形ではなく、活用も簡単であることから、星マーク1つである。また、⑤「～ています」は、形は大切である。しかし、意味的に動作継続を表し、15課③④「～ています」の結果状態と比較すると使用可能性が低い。結果状態の「～ています」は、ビジターセッションなどの自己紹介時などに使用できるからだ。従って、14課の動作継続「～ています」は星マーク2つとなっている。

文法項目の制限ではないが、他に初級カリキュラムで工夫している点を2つ紹介する。

一点目は、[備考]に記載されている「アクティビティ」である。基本的に、2回以上の課では日本センターで独自に開発した「会話アクティビティ」を実施している。学習した日本語を教室外で使用する機会が皆無に等しい受講生にとって、教室での運用体験は自身の学習成果を試し、次への目標、ステップになる重要な動機付けの一つとなっている。

二点目は、[導入回]である。15課のように文法項目を教科書の提出順に教えない場合もある。受講生の理解の負担にならないように、「一般から特殊へ」「簡単なものから難しいものへ」ということを徹底し、また使用可能性等も考慮した結果である。15課の場合、③④「～ています」は、①「～てもいいです」②「～てはいけません」と比較すると、ビジターセッションなどを控えている受講生にとって使用可能性が高いため1回目に教えるのである。

#### 4. 評価：受講生授業評価アンケート結果

日本センターでは、コース中、受講生に講師や授業の評価アンケートを実施している。以下は、全アンケート結果のうち、本稿に直接関係する項目を抜粋したものである<sup>(4)</sup>。

受講生は5段階で評価することになっている。「教え方のスピード」に関しては、[5 速すぎる、4 速い、3 ちょうどいい、2 遅い、1 遅すぎる]、「ビジターセッションの時間」「日本事情の時間」に関しては、[5 多すぎる、4 多い、3 ちょうどいい、2 少ない、1 少なすぎる]と評価する。

「教え方のスピード」というのは、日本語の語学学習に関する評価である。アンケート結果によると、2006年1月は3.65（平均）、2006年5月は3.52（平均）とどちらも平均点3.00を上回り、受講生は授業進度が速いと感じている。自由記述欄も設けてあり、そこにも進度についてのコメントが多数寄せられた。例えば、「この学期は授業のスピードが速すぎる（2006年

表2 授業評価アンケート結果（2006年1月実施：2005年秋コース）

質問項目	初級1	初級2	初級3	初級4	平均
教え方のスピード	3.40	3.50	3.85	4.00	3.68
ビジターセッションの時間	2.00	2.50	2.80	2.00	2.32
日本事情の時間	2.10	2.50	2.45	2.40	2.36

表3 授業評価アンケート結果(2006年5月実施:2006年春コース)

質問項目	初級1	初級2	初級3	初級4	平均
教え方のスピード	3.35	3.33	3.65	3.75	3.52
ビジターセッションの時間	1.83	2.16	2.60	2.06	2.16
日本事情の時間	2.83	2.33	2.15	1.81	2.28

1月実施、初級2受講生他)」という意見があった。受講生は2005年春コースまでの1課に対して3回6時間のペースで教えていた時と比較し、授業進度が以前と異なることに戸惑いをみていることがうかがえる。また、「授業のスピードが速いので、覚えにくい(2006年1月実施、初級4受講生)」「新しい課の前に前の課の復習を十分にしない(2006年5月実施、初級3受講生)」「いつも授業の最後に漢字テスト、文法テストを実施してほしい(2006年5月実施、初級4受講生)」といった声も聞かれた。受講生は、学習項目を十分消化しきれていないので、復習の時間を十分と確認テストの実施をして定着を図ってほしいと願っている。

一方、「ビジターセッションの時間」「日本事情の時間」は、日本事情や日本文化に接する時間配分への評価であるが、2006年1月は「ビジターセッションの時間」2.32(平均)、「日本事情の時間」2.36(平均)、2006年5月は「ビジターセッションの時間」2.16(平均)、「日本事情の時間」2.28(平均)と低い値となっている。受講生は日本事情・文化紹介の時間が少ないと感じていることが読み取れる。自由記述においても、「日本の習慣や日本についてもっと知りたい。(2006年5月実施、初級2の受講生)」「日本事情の時間を増やしてほしい(2006年1月実施、初級3受講生)」などというコメントが多くあった。

## 5. 今後の課題

コース中、日本事情・日本文化に触れる機会を9時間(2.6回に1回)程度確保しているにも関わらず、受講生はさらに増やしてほしいと願っている。このことは、教室外で日本人や日本文化に接する機会が少なく、日本の情報も入手し難い環境において、コースを運営する側の責任として、日本事情・日本文化紹介の時間を積極的にカリキュラムに組み込むという日本センターの方向性は間違っていないことを証明している。しかし、これ以上時間数を増やすことは困難である。なぜなら、日本語の語学学習に充てる時間をさらに削減することも、在留邦人の絶対数が少ない現状で、ビジターセッションを現状(1クラス2回)以上に開催することもできないからである。受講生の声に応えるためには、今後、日本事情や日本文化紹介を中心とした短期コースの立ち上げなど、他の手段での対応を模索する必要があるだろう。

次に、授業進度についてであるが、『みんなの日本語』の進度表の見直しが急務である。特に、星マーク1つの扱いについて検討しなければならない。星マーク1つの項目については、

授業中に紹介するのみである。このことで、受講生は消化不良を起こしている可能性が高い。有効な解決策の一つとして、星マーク1つのような重要度の低い文法項目については全く授業中に触れず、教えないということである。これを実施するためには、後の課への影響や、今後中級、上級へと進み、日本語能力試験なども視野に入れている一部の受講生のことも考慮し、各項目の重要度設定（星マークの数）をさらに精査する必要がある。

また、教師陣への定期的な指導を通して、教師の能力を引き上げることが求められる。まず、各文法項目の重要度を全体的に把握していることを徹底させなければならない。その上で、重要度の高い項目の内、定着していない項目を見抜く力を養い、授業中に十分復習をして、受講生に消化不良を起こさせないようにする必要がある。まんべんなく教科書どおりに授業を進めるのではなく、本試みのように強弱をつけた教え方の場合、受講生に満足のいく授業を提供するには、教師陣の教授能力の底上げを図ることが肝要である。

## 6. この試みの意義

本稿で紹介した日本センターでの新しい試みは、海外の日本語教育現場に適した新しい教科書作成への第一歩としても位置づけることができる。

海外の日本語教育機関においては、日本国内の学習者向けの教科書を使用すると現状にそぐわないことが生じる。それは、海外と日本国内の教授環境が全く異なることに因るところが大きい。しかし、従来海外においても、日本国内の学習者のために開発された教科書が使われてきた。これらの教科書は以下を当然の前提としている。

- ① 週20時間程度の集中的な日本語学習が保証されている。
- ② 学習者は日本語を使えるようになることに強い欲求を持つ。
- ③ 学習者が教室外で自然な日本語に没入できる。
- ④ 学習者の周囲には日本文化が遍在する。

ところが、海外、特にカザフスタンのような国・地域の日本語教育においては、これらの条件が満たされていない場合がほとんどである。特に③、④の状況は存在しない。学習環境が全く異なっているのだから、海外の現状に適合した教科書が開発されるべきである。

海外における日本語教育に適合した教科書には、以下の項目が必須である。

### ① トピックシラバス

学生の動機付けを維持するために、学生の興味をそそるような内容でなければならない。

### ② Teacher Friendly：経験のない教師にも使いやすい

海外では、ネイティブ教師、ノンネイティブ教師ともに教授法のトレーニングを受けたことのない教師が教壇に立つことも多い。

### ③ Student Friendly：学習者の学習の利便を最大限に図る

- ・母語による解説(勤労者は仕事の都合で欠席する場合がままあり、欠席したところは自習できるように配慮する)
  - ・話題・分野別の語彙リスト
  - ・漢字学習の最小化(漢字を上級までで2000も覚えさせるのは時間的に無理に等しい)
- ④ Task Oriented: 日本語を「使わせる」部分を充実させる
  - ⑤ 日本文化に関する情報が充実している
  - ⑥ 教授文型の厳選  
重要度の低い文型は大胆にカットする。カットしたところは文型練習ではなく、会話、読解練習などで学ばせる。
  - ⑦ 教科書自体が薄い  
学習時間が短く、拡散的な状況に対応。

上記の項目を満たした教科書作成をゼロから行うのは、非常に困難である。既存の教科書を現場に合わせ、工夫していくことから始めるのが地道な方法であろう。海外の環境に適した教科書が求められている今、日本センターの新しい試みは、問題、課題を抱えてはいるが、新しい教科書作成への現実的な実践と言えるのではないだろうか。

〔注〕

- (<sup>1</sup>) 福島(2006)では、『地域内に日本語コミュニティがなく、旅行、留学等で日本に行くことも稀で、教室外で日本語と接触のない海外環境における日本語学習環境』を『孤立環境における日本語教育』と呼ぶ。」とある。
- (<sup>2</sup>) カザフスタン日本人材開発センターは、ODA事業の一環で、日本による市場経済化支援の拠点として2002年9月に設立された。「ビジネスによる実務人材開発を通じたカザフスタンの市場経済化促進」と「日本・カザフスタン間の交流・協力関係の促進」を目的とし、具体的には主に「①市場経済化促進のための人材育成研修(ビジネスコース) ②市場経済化および相互理解促進のための日本語研修(日本語コース) ③相互理解促進のための交流事業」の3つの事業を行っている。日本人材開発センターは、カザフスタン以外に、ウズベキスタン、キルギス、ウクライナ、モンゴル、カンボジア、ベトナム、ミャンマー、ラオスにもある。
- (<sup>3</sup>) 日本センターのカリキュラムでは、「1回2時間×週2回×16週(4ヶ月)=64時間」が単位となる。初級を終えるには、64時間×4=256時間の配当で2年かかる。さらに、中級は64時間×2=128時間、上級は64時間×2=128時間と、2年の年月が必要となる。初級から上級までの課程を修了するのに4年かかり、しかもその合計の学習時間は512時間に過ぎない。日本国内の民間日本語学校の進学を目指すコースでは、「1日4時間×5日×20週間(半年)=400時間」が単位となり、初級400時間・中級400時間・上級400時間の合計1,200時間(1.5年)で日本語能力試験1級のレベルに達するよう、カリキュラムが組まれていることを考慮すると、日本センターの学習時間数は非常に少ないことが分かる。
- (<sup>4</sup>) アンケートは全クラスで授業中に担当教師以外の者が実施している。ロシア語で回答する形式である。回答者はアンケート実施当日に出席した受講生であり、人数は以下のとおりである。2006年1月実施分は、「初級1」41名(全47名)、「初級2」27名(全28名)、「初級3」14名(全22名)、「初級4」20名(全21名)。



## カザフスタンにおける日本語初級カリキュラム

2006年5月実施分は、「初級1」20名（全33名）、「初級2」27名（全40名）、「初級3」17名（全25名）、「初級4」16名（全19名）となっている。全アンケート内容（日本語版）は、資料2を参照されたい。

### 〔参考文献〕

- アジア太平洋観光交流センター（2006）『世界観光統計資料集（2006年版）』  
 福島青史・イヴァノヴァ・マリーナ（2006）「孤立環境における日本語教育の社会文脈化の試み ウズベキスタン・日本人材開発センターを例として」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、49-64  
 宇山智彦（編）（2003）『中央アジアを知るための60章』明石書店  
 外務省ホームページ「各国・地域情勢 カザフスタン」  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kazakhstan/data.html> 2006年9月19日参照  
 カザフスタン日本人材開発センターHP  
<http://japancenter.jica.go.jp/kazakhstan.html> 2006年12月16日参照

### 〔資料〕

#### 資料1 初級2 『みんなの日本語Ⅰ』進捗表（14課～25課）

課	回数	文型項目（練習Aに沿って）	重要度	導入回	備考
14	3	① 書きます 書いて（注）		1回目	
		② 左へまがってください。		1回目	
		③ すみませんが、塩をとってください。		1回目	
		④ 手伝いましょうか。		2回目	
		⑤ ミラーさんは今レポートを読んでいます。		2回目	
				3回目	会話、聴解 アクティビティ
15	2	① 鉛筆で書いてもいいです。		2回目	会話、聴解 アクティビティ
		② お酒を飲んではいけません。		2回目	
		③ 私は京都に住んでいます。		1回目	
		④ ミラーさんはIMCで働いています。		1回目	
16	1	① あした神戸へ行って、映画を見て、買い物します。		1回目	会話
		② 電話をかけてから、友達のうちへ行きます。		1回目	
		③ カリナさんは背が高いです。		1回目	
		④ ミラーさんは若くて元気です。		1回目	
17	2	① すいます すわない（注）		1回目	
		② タバコをすわないで下さい。		1回目	
		③ 本を返さなければなりません。		1回目	
		④ 名前を書かなくてもいいです。		1回目	
		⑤ レポートはあした書きます。		2回目	
18	2	① 買います 買う（注）		1回目	
		② ミラーさんは日本語ができます。		1回目	
		③ ここでコピーができます。		1回目	

		④ 私の趣味はスポーツです。 ⑤ 寝る前に、本を読みます。		2回目 2回目	会話、聴解
19	2	① 書きます 書いた (注) ② 私は沖縄へ行ったことがあります。 ③ 毎晩テレビを見たり、本を読んだりします。		1回目 1回目 1回目	
		④ テレサちゃんは背が高くなりました。		2回目	会話、聴解 アクティビティ
20	3	① 書きます 書く (注) ② 私はあした東京へ行く。		1回目 1回目	
				2回目	①②の復習 会話、聴解
				3回目	アクティビティ
21	1	① あした雨がふると思います。 ② 首相はあした大統領に会うと言いました。 ③ あしたパーティーに来るでしょう。		1回目 1回目 1回目	会話
		① これは女の人が読む雑誌です。 ② <u>あのめがねをかけている人は山田さんです。</u> (最も基本的な文型です。②をはじめに導入してください。) ③ ワットさんが住んでいる所は横浜です。 ④ あの棚にある服を見せてください。 ⑤ 私が駅から近いうちがほしいです。 ⑥ 私は手紙を書く時間がありません。		1回目 1回目	会話
					1回目 1回目 1回目
23	2	① 道を渡るとき、車に気をつけます。 ② 家へ帰るとき、ケーキを買います。 ③ 眠いとき、コーヒーを飲みます。		1回目 1回目 1回目	
		④ このつまみを回すと、音が大きくなります。		2回目	会話、聴解 アクティビティ
24	3	① ミラーさんは私にワインをくれました。 ② これはブラジルのコーヒーです。サントスさんがくれました。 ③ 私はカリナさんにCDを貸してあげました。 ④ 私は山田さんに大阪城へ連れて行ってもらいました。		1回目 1回目 1回目 1回目	
		⑤ 山田さんは私に地図を書いてくれました。		2回目	1回目の復習
				3回目	会話、聴解、 アクティビティ
25	2	① のみます のんだら のんでも (注) ② 雨が降ったらいきません。		1回目 1回目	
		③ 10時になったら出かけましょう。 ④ いくら考えてもわかりません。		2回目 2回目	会話、聴解

(注) 「文で意味の導入、文のMM全体・個人練習、板書」という一連のことが終わった後で、語彙レベルでの活用の練習に入ってください。

カザフスタンにおける日本語初級カリキュラム

資料2 評価アンケート

「日本語の講師の活動や授業の評価」アンケート

あなたの講師： 1) \_\_\_\_\_ 2) \_\_\_\_\_

1. あなたは講師をどう評価しますか。5段階で評価してください。適当な数字に をしてください。

5 非常に賛成     4 賛成     3 どちらとも言えない     2 反対     1 非常に反対

	質 問 項 目	講師1)	講師2)
1	講師はいつも授業の準備をよくしてくる。	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
2	講師は意欲的に授業をして、授業はいつも面白い。	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
3	授業で役に立つことをたくさん学ぶ。	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
4	講師の説明は正確でわかりやすい。	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
5	講師は時間に正確。時間通りに授業を始め、時間通りに終わる。	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
6	講師に人間的な共感を持っている。	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
	合計：		

2. 日本語の授業について、どう評価しますか。(適当な数字に をして下さい。)

2.1 教え方のスピード

5 速すぎる    4 速い    3 ちょうどいい    2 遅い    1 遅すぎる

2.2 会話の時間

5 多すぎる    4 多い    3 ちょうどいい    2 少ない    1 少なすぎる

2.3 作文など書く練習の時間

5 多すぎる    4 多い    3 ちょうどいい    2 少ない    1 少なすぎる

2.4 漢字の時間

5 多すぎる    4 多い    3 ちょうどいい    2 少ない    1 少なすぎる

2.5 教科書などを読む時間

5 多すぎる    4 多い    3 ちょうどいい    2 少ない    1 少なすぎる

2.6 ビジターセッション

5 多すぎる    4 多い    3 ちょうどいい    2 少ない    1 少なすぎる

2.7 日本事情

5 多すぎる    4 多い    3 ちょうどいい    2 少ない    1 少なすぎる

3. 講師、授業、教材、コース全体についてコメントを書いて下さい。

---



---



---